

# 29 大井市場盛衰記

明治5年4月7日の深更、大井常夜灯に大悪人征伐のピラが張り出され、翌8日夜8時、深津県賀陽郡足守村鍋屋騒動が起きました。

斬首刑1名を出した事件の顛末はともかく、このことは、当時大井常夜灯一帯が多くの人が行き交う場所であったことを物語るものでしょう。

大井は福谷、高田、杉谷の出入口に当たる谷口集落で、地形的に人・物の集まる場所でした。

中世には、市場が開設されていたと言われます。(岡山文庫「山陽路の地理散歩」)だとすれば、湊川の戦(1336年)に功のあった大森次郎左衛門尉盛清が交通・経済の要衝の地に鍛冶山城を築いたのも頷けます。

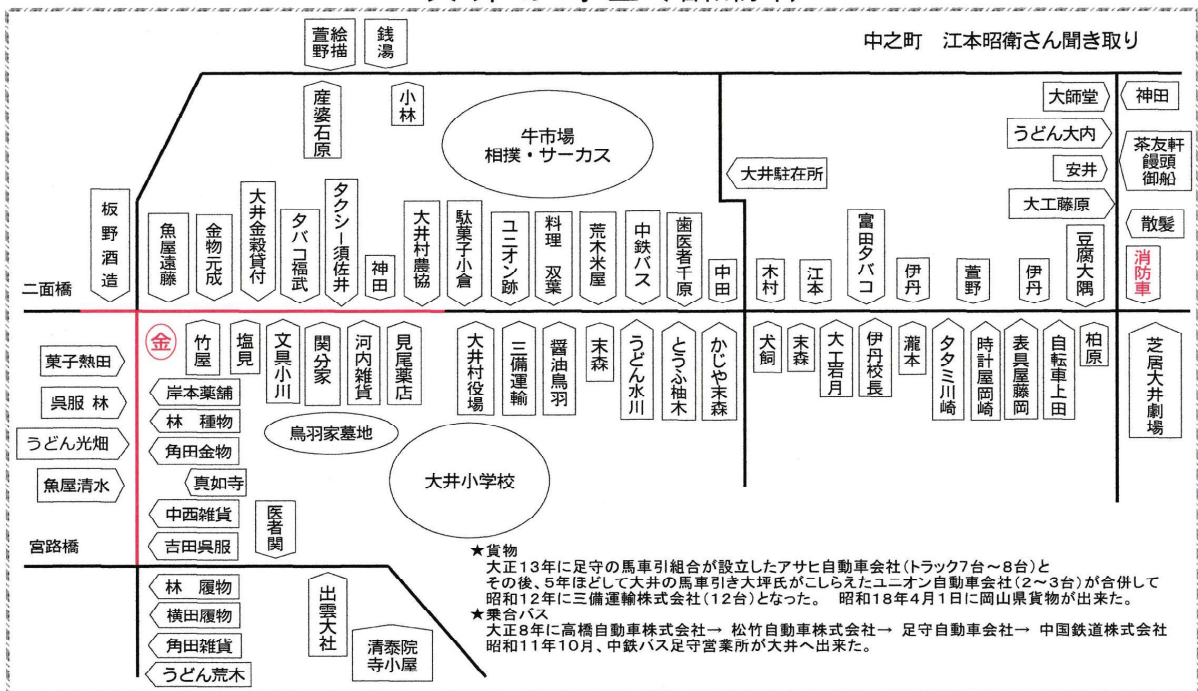


即ち、往時の大井市場は、城山から金坂を下った古市場に栄えたと考えられます。足守庄の用水確保を目的の大堰は完成していましたが、大堰に護られる現在の新町は、未だ氾濫原で、市が立つには尚時間を要するのです。かくして、古市場にスタートした大井市場は、地勢上大いに繁盛しました。しかし、関ヶ原の戦は市の命運を左右することになるのです。

豊臣秀吉の正室寧々の弟木下家定が2万5千石の領主として備中足守に陣屋町を構えることとなります。このため、大井の間屋級の商人は陣屋町へ引き抜かれ、経済の中心は、足守へ移行、江戸時代末には三・八・五・十の市が開かれるまでに至りました。(岡山大学教育学部「陣屋町の研究」、以下同)

しかしこれが、明治4年の廃藩置県と共に再び大井へ戻ります。何故、足守へ根付かなかったのか。その原因はどうやら交通用具の発達にありそうです。市は路上で開かれます。狭い路上に人と物、一輪車から大八車、更に、馬車が登場します。つまり、市の安全確保のため、当局から市の閉鎖を迫られたのでした。

大井の町並(昭和初年)



このような事情から組合をつくり大井に土地を求める者もありました。(前頁図の岸本薬舗から吉田呉服店迄の間)

新しい大井の市は、旧大井小学校前から二面橋までの道筋と、金比羅常夜灯から西へ宮路橋南詰までの範囲でした。(前頁の赤線道路部)

三・八・五・十の市の中でも、五と十の市は

本市と呼ばれ、南は下津井、沙美、笠岡から仲買人が海産物を、北は大和、尾原、有漢、円城方面から柿、栗、薪炭、築材、青果物等12～13貫の荷を担ぎ、何十人もが列をなし朝7時の市開きに合わせやって来ました。

一日商った後、一杯を傾け路上に寝転んだ者に、町内の者は毛布を掛けてやったという話もあります。(前頁「大井の町並」の「うどん屋」とは「一杯飲み屋」です。)

三・八の市は五・十ほど賑やかではなく近郷の人達の集まりでした。明治末頃の間屋は2～3軒、仲買人が20人。ある間屋さんなどは朝3時に店を出発、岡山、玉島、茶屋町、下津井方面の仲買人を廻り海産物を仕入れ、夜10時に帰るといふ仕事ぶりでした。

しかし、市の最盛期は大正10年頃まで、以降次第にさびれました。その大きな理由が交通機関の発達と言います。かつて、足守から大井に移ったのも似たような理由であることを考えれば皮肉なことです。

そして、戦時経済統制で終止符が打たれたのです。戦後、復活の動きもありましたが、月並市開催までには至らず盆市、暮市及び祭礼市の3回まで止まり。

盆市は、お盆用品の素麺、椎茸、干瓢、高野豆腐。暮市は、ブリ市で12月25日に開かれました。祭礼市は、魚市と呼ばれました。しかしこれらに昔の賑わいはなく、市らしいものは、暮れのブリ市ぐらいのものでした。

さて、大井市場の賑わいに花を添えたものに大相撲がありました。大井神社に掛かる奉納額から、昭和4年12月と同年9年4月の2回の大井巡業を知ることが出来ます。

写真は、昭和9年4月のものです。

東方大関・越ノ海、同関脇・小野ヶ嶽、桂川…。西方大関・九州山、関脇・伊達ノ花、小結・豊錦など大勢の力士、行司、親方連中の名前が墨書してあります。

しかし、同年春の本場所番付を見ますと、なんと大井場所東方大関の越ノ海は東前頭13枚目、同様に関脇の小野ヶ嶽は東十両2枚目、桂川は西十両6枚目。西方大関九州山は西前頭16枚目、関脇伊達ノ花は西十両6枚目という次第。いくら情報伝達機能が貧弱であった時代にしても… 怒！

いやいや、神のみぞ知ることなれば御神前にて騒ぎ立てることは止めた方がよさそうです。



市を象徴する町戎



町戎の祠に納まる恵比須と大黒



昭和9年大相撲奉納額